

Title	英語コミュニケーションの魅力を伝えることを主目的とし学部専門性も取り入れた授業の紹介
Author(s)	福田, 朝生
Citation	沖縄科学防災環境学会論文集 (Education) , 6(1): 1-3
Issue Date	2021-03-04
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12001/24806
Rights	

英語コミュニケーションの魅力を伝えることを 主目的とし学部専門性も取り入れた 授業の紹介

福田 朝生¹

¹ 琉球大学工学部 (〒903-0213 沖縄県中頭郡西原町字千原1番地)
E-mail: t-fukuda@tec.u-ryukyu.ac.jp

本稿では、琉球大学工学部で2020年度に開講した英語コミュニケーションの魅力を伝えることを主目的とした授業について紹介する。この授業では、専門科目に関する国際的な課題を留学生が発表し、これを題材として学生が英語で議論をしながら解決策を検討するものである。必ずしも英語が得意ではない学生も含めてこのような授業が実現できた背景には、英語翻訳アプリの近年の目覚ましい発展があり、本授業では翻訳アプリの使用を認めたことで実現したといえる。授業後のアンケート結果より、同様の授業をさらに受講したいという声など高評価の意見が多く、本授業のような新しいタイプの授業に対する学生側の需要は大きいものと推察される。

Key Words: English education, communication, translation application, international issue

1. はじめに

わが国の科学技術の発展や、わが国が国際問題に対して広く貢献していくためには、学生の英語力の向上および、学生が国際感覚を身に着けることが必要であることは言うまでもない。しかし、学生自らが、これらの課題に対して関心を持たない限りは、学生が主体的にこれらの課題に継続的に取り組むことは難しい。今回、琉球大学工学部社会基盤デザインコースでは、学生の主体的な英語力向上に対する取り組みや、学生が国際化問題に関心を持つことの動機づけを目的として新たな授業を開講した。本稿では、この授業の位置づけや目的、授業内容およびその成果について報告する。

2. 授業の位置づけと目的

英語能力を身に着けることの最大の魅力は、自分と異なる環境で生活してきた海外の人々と会話ができ、これをとおして、自身の視野を広げることができる点ではないだろうか。ここではこれを「英語コミュニケーションの魅力」とよぶこととする。学生がこの魅力を実感することができれば、学生が主体的に継続的に英語学習に取り組み、また、国際化問題に対して、より関心を持つ

ようになるものと著者は考えている。また、大学では、このような英語コミュニケーションの魅力を伝える授業は、初期の学年の1年次または2年次で提供されることが望ましい。

英語コミュニケーションの魅力との関係を踏まえて、琉球大学工学部で提供されている科目を簡単に分析する。1年次または、2年次の学生を対象として開講されている英語科目は、共通科目としての英語科目がある。共通科目としての英語科目では、語学としての厳密な英語授業が提供されている。したがって、英語教育を専門とする教員が担当せざるを得ない。一方で、工学部の学生は、工学に興味を持って入学していることから、英語学習に対する学生への動機づけを考えると、共通科目としての英語科目に加えて、専門的话题に触れながら英語を教育することも重要である。さらに、ある程度英語を話すことができる留学生などに授業をサポートしてもらいながら、学生の英語コミュニケーションの機会を増やす仕組みを作ることも重要である。また、共通科目では、国際的な問題を扱う科目も提供されているが、これらの科目では、英語学習に対する動機づけが直接的には行われていないことが一般的である。

国際的な問題と英語学習は、共にリンクするものであるが、上記のように、学生が自身の最も興味のある専門分野でかつ、これに関する国際問題について、英語でコ

コミュニケーションを行う科目はこれまでのところ十分に行われてこなかったといえる。この背景のもっとも大きな要素としては、学生自身の英語能力が問題となり、学生が主体的に専門分野に対して英語でコミュニケーションを図ることが難しかった点が挙げられる。一方で、近年目覚ましい発展を遂げている英語翻訳アプリを活用することで、専門分野についても、学生が英語を使ってコミュニケーションを図ることが可能となる。このような翻訳アプリの進展を踏まえ、琉球大学工学部社会基盤デザインコースでは、学部1年次、2年次を主な対象として、英語学習に関する動機づけや、国際問題に対する興味を養う目的で、2020年度に新たに「International civil and environmental engineering seminar」という授業を開講した。

この授業は、大学院の留学生と学部学生が英語で交流するものであり、原則日本語は禁止である。留学生が自国の社会基盤や環境問題に関する課題を提示し、学部生と留学生が英語で相談しながらその解決策を考察し、学部生が英語で解決策をプレゼンテーションする。本授業で取り組む課題は、学生が課題に対して興味を持ちやすいように、学生の専門分野である社会基盤に関する国際問題を基本とした。しかし、必ずしも専門家ではない留学生からの積極的な話題提供を促すため、課題設定の許容範囲を種々の環境問題にまで広げた。このように、本授業では、英語コミュニケーションの魅力を伝えることを主目的としたため、専門性についてはやや弱いものであるといえる。

前述のように、本授業では、スマートフォンやノートパソコンなどの自動翻訳アプリの使用を許可した。これにより、学生が主体的に専門分野について英語でコミュニケーションを図ることができる新しいタイプの授業が実現した。

3. 具体的な授業内容

本授業は、2021年2月17日と18日に集中講義として実施された。受講生は、合計で24名であり、1年次は3名、2年次は15名および3年次は6名である。サポート役の大学院の留学生は4名であり、フィリピンの学生が1名、アフガニスタンの学生が2名、キルギスの学生が1名である。

表-1に本授業のタイムスケジュールを示す。4名の留学生の内、3名から議論のための課題を挙げてもらった。留学生や受講生が課題について必ずしも精通していない中で、同一課題について長時間議論することは難しい。一方で、学生は課題解決策のプレゼンを行う必要があり、この準備時間も必要であるため課題が多すぎることも問題である。この両者を考慮して、本授業では1課題を約

表-1 授業のタイムスケジュール

		初日	2日目	
1 時 限 目	課題 2	授業の概要説明	ディスカッション及び発表準備	課題 3
		留学生による 課題 1 の説明	学生による課題解決策に関するプレゼンテーション	
2 時 限 目	課題 1	留学生へのインタビュー及びディスカッション	留学生による 課題 3 の説明	課題 3
		ディスカッション及び発表準備	留学生へのインタビュー及びディスカッション	
3 時 限 目	課題 1	ディスカッション及び発表準備	ディスカッション及び発表準備	課題 3
		学生による課題解決策に関するプレゼンテーション		
4 時 限 目	課題 2	留学生による 課題 2 の説明	学生による課題解決策に関するプレゼンテーション	課題 3
		留学生へのインタビュー及びディスカッション		
		総合討議		



写真-1 ディスカッションの様子

2〜3時間程度とし、2日間で3つの課題を設定した。

課題1はアフガニスタンの学生からであり、アフガニスタンのヘラートのオールドシティーを対象に、観光資源となる古い建築物を維持しながら如何に近代化を図るかという課題が出された。2つ目の課題は、アフガニスタンの別の学生からであり、貧困などが大きな問題となっているアフガニスタンで教育を如何に充実していくかという課題が出された。3つ目の課題はキルギスの学生からである。山岳地帯の多いキルギスにおいて、土砂災害が頻繁に生じる中で如何に道路を安全に利用していくかという課題が出された。

これらの課題に対して学生は、それぞれ6、7名程度の4つのグループに分けられ、課題に対して留学生と英語で議論しながら解決策を検討し、解決策について英語でプレゼンテーションを行った。

3つの課題のプレゼンテーションを、授業の終わりに全てまとめて行うことも可能であるが、本授業では、各課題ごとに、プレゼンテーションを行うこととした。こ

れにより、前の課題に対する取り組み方や、プレゼンテーション方法の反省をできるだけ活かして次の課題に取り組めるようにした。

グループ分けは、1学年から3学年まで1グループにすべて含むように分けられており、かつ、課題毎に新たにグループ分けを行った。このようにした理由は、各課題ごとに初めて会う学生が多くなるため、学生のコミュニケーション能力の向上につながると考えたためである。さらに、本授業では、通常の授業とは異なる雰囲気を出してコミュニケーションの活性化を図るため、それぞれの名前を姓ではなく名（下の名前）で呼ぶことを基本とした。また、互いの名前がわかるように、簡易なネームプレートを作成し、常に身に着けるようにした。

表-1のタイムスケジュールに示すように、各課題の最初に留学生から課題に対して説明がなされた。その後、グループ毎の議論に移る。その際、課題を説明した留学生は、10分程度毎に各グループを回り、グループ員から課題に関するインタビューを受けた。残りのサポート役の留学生は、インタビューを行っていないグループに行き、課題に対して共に議論したり、学生が何を議論しているのかを聞いて回った。全グループのインタビューが終わるのは、概ね1時間程度であり、その後各グループは、議論を継続しながら発表の準備をする。そして各課題の最後に、グループ毎に英語で発表を行う。発表時にはすべての人が必ず1回は話すルールを設けた。

4. 授業の様子および授業の成果

多くの学生にとって、英語でしか話すことができない授業はじめての様子であり、授業の概要説明や、第1課題の留学生によるプレゼン時（表-1参照）には、学生からの質問がほぼ出なかった。しかし、その後の留学生へのインタビューやディスカッション（写真-1参照）を通じて、徐々に英語を話すことに慣れていき、第1回目の受講生による課題解決策のプレゼン時には、何名からか英語で質問も出るようになった。また、プレゼンテーション時には、「Hi, guys」などと言いながら積極的に自然に英語を話そうとする学生も何名か見られた。質疑の際にはわからない単語も多く、四苦八苦する場面もあったが、翻訳機を使いながらなんとか英語で議論を継続することができていた。

プレゼンテーションの際には質疑の時間を設けたが、この際に質問ができた学生は、全体の1/3程度であり、まだ多くの学生にとって人前で英語で質問することに対

しては抵抗があるようであった。また、少し気が抜けると日本語を話した学生がいたため、随時英語だけを話すようにと、注意する必要がある。

サポート役として参加した留学生のコミュニケーション能力は非常に高く、留学生から日本人の学生に積極的にコミュニケーションをとってもらうことができた。これは良かった点である。一方で、本授業の効果は留学生の能力によるところが大きく、このような状況はコンスタントなレベルを確保する上で、本授業の課題になり得ることも指摘しておく。

本授業の授業評価アンケートで得られたいくつかのコメントを紹介する。

「グループワークを深く考えて、意見を英語でプレゼンするという貴重な経験ができたので良かったなと思いました。」。「時間が限られていて余裕がなかったのは大変でしたが、とても楽しかったです。集中講義だけでなく普通の授業でもやってほしいです。」。「思った以上に言葉が出ず、話すのにとっても苦勞しました。しかし、このクラスで英語の楽しさを少し実感できました。このクラスに参加してくださった皆さんありがとうございました。（原文英語を翻訳）」。

アンケート結果はいずれも肯定的である。また、学生が、本授業を通して英語コミュニケーションの魅力を十分認識することができたと推定されるコメントも見られる。

5. おわりに

本授業では、翻訳アプリの使用を認めることで、学生と留学生が英語で専門分野の国際的課題について議論する新しいタイプの授業を実現した。授業後のアンケート結果から、本授業は学生に、英語コミュニケーションの魅力を十分に伝えることができたと判断される。また、このような授業を今後も受講したいとの希望もあることから、このような英語コミュニケーションの魅力を伝える授業をさらに展開していくことが重要と考えられる。

謝辞：本授業は、留学生の Vincent Andrew Dayag Amores 氏、Sayed Shoaib Samimi 氏、Yasin Mumtaz 氏、Abdyrashym Kyzy Aigerim 氏に大いにサポートしていただいた。ここに謝意を表します。本授業の構想にあたり、琉球大学工学部 仲座栄三教授、下里哲弘教授には貴重なアドバイスをいただいた。ここに謝意を表します。

(Received Feb 26, 2021)
(Accepted Mar 4, 2021)